

冷しビールが無い此家ななかまとの木實のり

青函連絡船、歸路

ロールのピッチの一つなく航行了り船員ら白服

十和田湖へ向ふ（十七月午後一時青森驛發）

酸ヶ湯温泉

村の子らかくれ遊ぶ笹の丈け虎杖の花散り

奥入瀬の溪流をゆく、九十九島

十が島たしかに見た小さい落の葉があり力草の穂があり

十和田湖一周

青い木々にかくれぬ岩があり岩根青い苔生え

観光館一泊、十七日夜

季節風ぐもり青い湖を船すれくゆく

ひくい家々つゞくひろい家炭火をわかちあさく



十和田神社

湖荒れしづもりゆく家あるへ露や露草

和井内

湖へ入るやうパスゆく養狐所をよぎり

湯漱温泉

通草採る澤があり家べ畔豆の葉しげり

大更驛所見

丸太かつぐ人々肩ひろく腰太くあり秋の日

平泉驛を過ぐ

中尊寺へ上ぼるみちますぐ麻刈りてゐ山畑

歸宅

机上のものもの雜然あるじを迎へ冷し西瓜があり



すだれ除れた部屋うち固い帯をして起ち居小母さん

虫の擬ひ聲をよくし虫の學者肺て死んだ

風吹くへ出づるチヨツキ無い合服を着るひと

又線が效くだけ效き人のからだがあり秋の日

早りて陸稻しいなの實のり箒木しげり

血壓のこゝ少し知りてたばこ少しのむ若い男

何番も摘んだ茶の木原つゞき沼へり家並び

索道下りてゆく谷濕り水引草花さき

あかざの葉を飯に炊くこその木を杖に切るこ植物の先生

川はら水づく草むら日中虫鳴いて



良品の下品の信州の白菜が来る秋になり

茄子汁を茄子焼をにちく食ふひと齒並黒く

萩のごこ節くれ竹茂りてあり藪そばの塀うち

双子山いくぶん高低あり草はら馬酔木が實のり

青々生うる草を刈り楓植うるなご經營す地めん

庭に除草機あり室に掃除機があり初秋の日てり

ズツク囊一ばい捕りてあり稻子囊中にうごき

蓮根の交ぜ飯炊くやつちやばうらに栖ミ小母さん

沙魚の目に似る双つばつた追ふごごも

砂の無い結うるかよろこばし黄鶏頭咲く家にて



仔猫々々して日中草咬むあり板間ひろい家にて

山の子ら谷の子ら通ふ學校のみち犬蓼花さき

海風が吹き棚田の稻ますぐに實のり

前より後よりチャブ臺並び海苔茶漬の家うち

栗買ふ男弗入共につかみ顧みなく行つた

對ふ塀の蔦もみち見つゝ舗道のギザギザ歩む人

固くしぼり柿の澁を貯ふる家うち

桑畠に入りて豆を引く人ら高い桑の木

河原つゞき稲田刈りてあり田の畔の石石

この日遠足を休み眼帯してゐるこども門内



手術場に入りて冷えくゝ窓の下たゞあかり

満干ない河いつも濁り岸のぶらたぬ落葉

松ごうふ食ふ人々にまじり青年

秋霖部屋うちに飼ふ金魚口まるく息する

蓮根掘るここなくて沼をかくし蓮の葉

卯つ木房々に實のり雨水たゞへ

雨の日樹の幹ぬれて蓑虫まぎれ樹の皮

喉手術したこども床はなれをり籠の栗

黙つて柚子もいでくれるまろい頬のかみさん

露朝一つ一つ雞のとさか診る人



がらす中に飼ふ金魚ぬらくからだあり木の間秋の日

桃の木もみづるまへ桃の葉がちゞれ砂畑

葱畑の畝々井然あり紫蘇の木が實のり

檜木に檜の木に交り椽の木の葉が日焦け

稻雀去つたあゝ畑中の木に雀をり

焼りんご好く少年學園を下がり家にたゞ居り

牛蒡ぬいた跡たゞ見てゐる藪掘りの生徒ら

バラに並べ賣場に茸賣り驛員ら通る

石投げてはぎんなん落とすこごもら正門のうち

座ぶごんのカバー襲々ありて坐り虫その下に鳴き



土手下に働くをんなに寝かす兒が土手にをり秋の日

籐椅子にふこん敷いてゐる人に椿の木太く

川口を出でてすぐわらさ釣る汐流れ

冷房やめた應接間すこし高くかがみがあり

桐の葉虫の穴あき露の葉風の穴あき川原に栖めり

鱒を干し建網を干しバスすれくゆく網代港

入齒すつかり出来て家びとをり庭木のざくろ

こんなになく沙魚を唐辛を焼きこがし男

小鮒を並べ少女らをり雀焼の家秋日に

坂みちを通學するこごもら家々木のみかん



蓑虫とちがひ葉の中にかくれ枝蛙をり木中

看護婦の詰所いつも空いて菊さしてあり水差しあり

石屋に割石賣切れる日があり小菊が咲いた

鍋のものものくふて汗かいてゐる人に青いみかん

栗茹でたてを賣り家うち小菊がつぼみ

家に兵泊りて栗飯を炊く太い栗の木があり

サラリーマンの母びと拵へる辨當鱒子があり

職員も職員も茶縞のいくぶんちがひ冬服

表に裏に炭俵を積み炭の店表口があり

冬の日書棚の書冊亂れずあり少女ら



人を迎ふ産院の部屋に部屋に炭火埋めあり

始終煮立つ鍋がありお櫃入を大切にかみさん

近く飛行場があり養蠶所かきそだち

手ま日まかけて耘り家まはり畑の小燕

晨よりやつちやばに濡れてネルのYシャツ着るをここ

芙蓉の實からくになつた此家に下婢二人をり

大根にちくぬかる、畑を通り河に釣るひと

棕櫚の葉を鋏み八つ手の花を間刈り住む人

地下へ地下へボーリング利き大地掘下げる人ら冬の日



墓域へすこし下りるみち山吹や萩や刈らずあり

芝生すりきれるところありばつたが跳ね

汐時を汐びたるちさい造船所うら草實のり

松原湖畔入澤先生詩碑除幕式 十月二十四日

幕まだありて碑の空を四十雀よぎり

空軍美足

紀元  
二十  
三年  
八月  
十日  
引谷  
紳中  
書





昭和十三年一月十日 印刷納本  
昭和十三年一月十五日 發行

〔定價一圓五十錢〕

東京市小石川區大塚仲町四十一番地四ノ八號

編輯 細谷雄大

複製 不許

印刷 東京市下谷區仲御徒町一ノ一七 寺倉正巳

印刷 東京市下谷區仲御徒町一ノ一七 寺倉正巳

電話下谷七六一九番



終

